

進捗状況の概要

1). 4月～7月 PBL型の初年次教育プログラムの実施（テーマⅠ：アクティブ・ラーニング）

新入生の教室外学習へ参加する意欲等を高めるべく、人間科学部1年次必修科目の「初年次セミナー」にてPBL型学修を導入し、教授法の事前研修等を経て本学専任教員13名による課題解決のプロセスを体感できる講義を実施した。

2). 4月～12月 AP事業型インターンシップの開発と実施（テーマⅠ：アクティブ・ラーニング & テーマⅡ：学修成果の可視化）

経営学科の教員及びキャリア支援課による受入企業の開拓に加え、NPO法人ディーブピープルと協力し、課題解決型のインターンシップの開発を行った。本学AP事業の肝となる①ルーブリックを利用した学生評価、②教員及び受入企業の担当者が学生の実習状況のモニタリングの実施とシステムの活用、③評価終了後のルーブリック及びモニタリングシステムへの意見収集、以上の3点への協力要請に応じた受入企業のインターンシップ・プログラムをこの事業対象として設定した。

①ルーブリックには7月に開催した拡大協力者会議にて、本学の「KUIS学修ベンチマーク」をインターンシップ・ルーブリックとして活用することとし、本学が目指す人材育成の目標が産業界等でも受け入れられるかについて測ることとした。

②学生の実習状況のモニタリングについて、担当教員が実習の場に直接参加できないプログラムについて、「リフレクション・カレッジシステム」を本学インターンシップ用にカスタマイズし、学生の活動報告が教員並びに企業担当者が同時に確認できるようにし、教員・企業担当者双方から学生へ実習期間中にフィードバックできるようにした。

③実習終了後、教職員が企業担当者へのアンケートとヒアリングを実施し、12月のインターンシップ成果報告会の際でもアンケート結果を基に情報交換会を実施した。

上記の取組の結果、受入企業は9社、AP事業型インターンシップ参加学生は45名となり、課題解決型インターンシップの開発及び実施のノウハウ蓄積、教員と企業担当者による学生のモニタリング手法の確立などの成果を上げた。

3). アセスメントテスト実施による客観的データによるインターンシップ評価

ジェネリックスキル測定テスト『PROG』を導入し、定点観測により「インターンシップ実習参加前（3月～4月実施）」と「インターンシップ実習参加後（9月実施）」の比較分析を実施した。その結果、①リテラシー領域ではインターンシップ経験による差は見られないが、コンピテンシー領域ではインターンシップ経験のある学生は伸びているという結果となり、特に行動持続力、課題発見力、実践力が伸びていることが見られた、②参加したインターンシップ・プログラム別の分析では、AP事業型のインターンシップ参加学生の伸長が最も高く、特に計画立案力、実践職の伸びが大きく、インターンシップ・プログラム参加によるコンピテンシーの伸びが明らかとなった。

4). 1月～3月 協力者会議・外部評価委員会による振り返りと総括（テーマⅠ：アクティブ・ラーニング & テーマⅡ：学修成果の可視化）

上記1)～3)の取組結果を基に1月に協力者会議、3月に外部評価委員会を開催し、平成27年度の取組の振り返りと総括を行った。3)の分析結果より、企業の規模に関わらず学生の伸長が見られたことについて外部評価委員より評価された点もあったが、大学と産業界等の評価の観点と尺度の共有については、産業界へのヒアリングや事例の収集をさらに充実させ、ルーブリックをよりよいものにしていくべきであるとの引き続き平成28年度以降への継続した取組を求められた。